

## 犠牲の《羊》の「名前」

——大江健三郎「人間の羊」論——

篠原 健

はじめに

「人間の羊」(『新潮』一九五八年二月号)は、発表当時、平野謙や江藤淳といった文芸評論家から注目を集めた作品である。同時代的な読解は、主に「僕」と「教員」の対立に焦点を当ててきた。平野謙は両者の「被虐者同士の自虐的な心理」<sup>1</sup>を主題として読み、江藤淳は大江自身の自作解説(「監禁されている状態を考えること」)を踏まえ、「僕」が「社会正義」を掲げる「教員」と「決定的に対立」<sup>2</sup>する構図を指摘した。江藤以降、「人間の羊」研究は、この「監禁されている状態」をいかに読み解くかに中心的な関心が寄せられてきた。<sup>3</sup>

近年では、従来の枠組みを更新するアプローチが見られる。高橋由貴は、「僕」と「外国兵」、「僕」と「教員」の関係性が組み替えられていく「言葉の力学」<sup>4</sup>を明らかにした。また、M・モラスキーは占領下のジェンダーと

セクシュアリティの問題に焦点を当て、本作が男性への性的暴力を描いた特異性を指摘した。<sup>5</sup> さらに佐久本佳奈は、異性愛規範と占領下の実定法という二重の〈法〉に着目し、「僕」と「教員」の関係を「鏡像的な関係性」として捉え直すことで、被占領者間の閉塞状況を鋭く分析している。<sup>6</sup>

これらの先行研究は「人間の羊」の読解を着実に深化させた。しかし、江藤以来一貫しているのは、分析の視座が「僕」——「教員」、「僕」——「外国兵」という二者関係に集中してきた点である。「僕」が深く傷つくのは、その姿を「被害を受けなかった者たち」（「教員」を含む）から嘲笑される瞬間である。この事実は、彼らの存在が集団全体の動態と密接に関わっていることを示している。また、バス空間に複数の「《羊》」が存在したにもかかわらず、なぜ「僕」一人が「教員」の標的として選び取られたのかという問題が看過されている。この重層的かつ動的な権力関係を説明するためには、固定的な二者関係論から脱却し、集団の力学が個人にいかに関与するかという視座が必要である。

本稿は、第一の柱として、「《羊たち》」という集団から「個」が「抽出」され、「犠牲の羊」として仕立て上げられる構造と力学を論じる。鍵となるのは、「教員」が「僕」に執拗に要求する「名前」である。「教員」は、「名前」を要求することで、「僕」を「《羊たち》」から個として分離し、「犠牲の羊」として社会に晒そうとする。

第二の柱として、本稿はこの「名前」をめぐる攻防を、占領下の言説空間という歴史的な脈に位置づける。すなわち、「僕」による「名前」の隠蔽という抵抗が、GHQのプレスコードという言説統制のもとで、いかなる効果を生んでいるのかを問う。テキストに特徴的な固有名詞の不在を、この歴史的な脈と接続することで、占領下における抵抗の可能性を考察する。

以下、まず「《羊たち》」という集団の形成過程を分析する。次に、「被害を受けなかった者たち」が単なる傍観者ではなく加害者であることを論じる。続いて、「外国兵」——「教員」——「《羊たち》」という権力の三層構造を明らかにする。その上で、「教員」による「僕」の個としての抽出とその過程で生じる「羞恥」の構造を検討する。さらに、「教員」の統制欲望を分析する。最後に、「僕」の語りを占領下の言説空間という歴史的文脈に位置づける。なお、本文の引用は『大江健三郎全小説』第一巻（講談社、二〇一八年）に拠る。

## 一、《羊たち》の形成

はじめに、「人間の羊」の粗筋を確認したい。冬の夜、バスに乗った「僕」は、「外国兵」の女が「僕」にからみつき、バスの傾きで転倒したことから、「外国兵」に衣服を剥ぎ取られ、他の乗客とともに尻を晒され「パンパン」と叩かれる。この時、日本人乗客は「くすくす笑」う。「外国兵」が去った後、「被害を受けなかった者たち」の代表格である「教員」は、『《羊たち》』に団結と告発を迫るが、「僕」は怒りを覚え、一人の『《羊》』が「教員」を殴る。バスを降りた「僕」を「教員」は執拗に追跡し、交番で事件を語り、「僕」に「犠牲の羊」となることを要求する。逃げる「僕」に「教員」は「お前の名前も、お前が受けた屈辱もみんな明るみに出してやる」と言い放つ。

このように粗筋を要約できる「人間の羊」において、作中の集団は複雑に組み替えられながら生成されている。テキストはバス空間内の乗客の秩序が「車掌」によって整序されている場面から始まる。「車掌」は「僕」

に「後部座席」への着席を指示する。こうして、「車掌」はバス空間に一定の秩序を構築していた。「僕を座席の隅に押しつけている外国兵たちは酒に酔って陽気だった」、「日本人の乗客たちは両側の窓にそった長い座席に坐って兵隊たちの騒ぎから眼をそむけていた」という語りから窺えるように、この秩序は「外国兵」と「日本人」というナショナルな境界線に従って乗客を配置するものであった。

しかし、この秩序は当初から不安定だった。「外国兵」と「外国兵の女」の「口争い」が示す緊張に加え、当事者たち自身がその二分法から逸脱する可能性を孕んでいた。「僕」が「家庭教師に使ったフランス語の初等文典を外套のポケットに押し入れて」いたという描写は、「僕」が日本語とフランス語という複数の言語を操る存在であり、単一の言語文化圏に閉じていないことを示している。さらに「外国兵の女」も自らを「東洋人だからね」と規定している。「車掌」は結果的に、こうした曖昧な存在を合流させている。

「僕」は当初「ゆっくり自分の中へ閉じこもり傍観していた。しかしこの潜在的な不安定性は、「外国兵の女」の「ねえ、あたいはこの子と寝たいわよ」という性的な発話によって顕在化する。「女」が性的な発話によって「僕」と結びつくことで、「車掌」が構築したナショナルな二分法に基づく秩序は明確に攪乱される。この瞬間、「外国兵」でも「日本人」でもない、言語的・性的に曖昧な存在という第三項が浮かび上がり、「車掌」や「外国兵」は当惑を示す。

その後、バス空間は動的な力場として、物語の展開に積極的に関与する。「バスが激しく傾」いたという偶然的な物理的要因が、「女」の転倒と、それに続く「外国兵」による《羊たち》の形成という新たな局面を招来する。

「怒りと酔い」を露わにする「外国兵」は「何か」を叫ぶ。「フランス語の初等文典」を持つ「僕」が英語を理解できないとは考えにくいだが、「僕」にはその単語が了解不可能であるかのように語られる。「僕」は言葉の意味内容から徹底的に遠ざけられている。

この言語の遮断は、単なる意思疎通の失敗に留まらない。「僕」は、了解不可能な「すさまじい言葉のおそいかかり」を一方的に浴びせられ、「小動物のように体を縮めた」と語られる。言語によるコミュニケーションの可能性を奪われた「僕」は、言葉の通じない「動物」へと貶められる。

この動物化は、続く身体への暴力を準備している。「僕」は「動物の毛皮を剥ぐように」外套を剥ぎ取られ、「四足の獣」のような嗜好をさせられる。衣服という文化的記号の剥奪は、「僕」から社会的属性を奪い、剥き出しの身体的客体へと還元する。言語によって「小動物」へと貶められ、次いで身体的にも「動物」として扱われること——これが「動物」化の内実であり、他者による管理が可能な対象への変質である。そして、この「外国兵」による「動物化」を完成させるのが、日本人乗客の視線と嘲笑である。このように「動物」化された「僕」は、日本人の乗客に見られ、「くすくす」と笑われ、「うちのめされ押しひしがれた」。

ここに秩序の転換が生じている。「車掌」によるナショナルな二分法に基づく秩序は崩壊し、「外国兵」による人間／動物の二分法が新たなバス空間の秩序となる。さらに「外国兵」は他の「日本人」の乗客たちも「動物」的に扱い、尻をパンパンと叩く「羊撃ち」の対象とすることで、「日本人」の中に《羊たち》を形成する。

「《羊たち》」とは、「外国兵」によって言葉を一方的に奪われ、さらには他の「日本人」乗客たちから嘲笑され

るといふ、言語的剝奪と「恥」の共有という二重の過程を経て形成された集団である。旧秩序を形成していた「車掌」は「車掌が子供のような透きとおつて響く悲鳴をあげながら暗い夜の霧の中へ走り逃れて行つた」という一節を最後にテキストから退場し、新たな秩序への転換が完了する。そしてこの「外国兵」による新たな秩序は、「外国兵たちが、女を連れてバスから降りて行つた」後も、バスの前半分と後部座席に分かれた日本人の乗客たちによつて引き継がれる。

## 二、「《羊たち》」と「被害を受けなかつた者たち」

《羊たち》は殆ど後部座席にかたまつて坐つていた。そして、教員たち、被害を受けなかつた者たちはバスの前半分に、興奮した顔を群がらせて僕らを見ていた。運転手も僕らと並んで後部座席に坐つていた。

この一節は、バス空間が二つに分かれていることを明確に示している。注目すべきは、「教員たち、被害を受けなかつた者たち」という並列表現である。語り手「僕」は、「被害を受けなかつた者たち」という集団を、「教員たち」という呼称で代表させている。これは、後に明らかになる「教員」の「代表」としての性格を予示している。

「運転手」が運転台に戻りバスが発車すると、「被害を受けなかつた者たち」は活気を取り戻す。「教員」を中心として、彼らは「《羊たち》」の「《被害》」をいたわり、「黙つて耐えていることはいけない」「警官に事情を話

すべきですよ」と、「励まし」の言葉を投げかける。しかし「《羊たち》」は沈黙を守り続け、声は「透明な壁」に遮られたかのように届かない。

だが「教員」の「恥をかかされた者、はずかしめを受けた者は、団結しなければいけません」という言葉は「透明な壁」を突き破り、「僕」に「急激な怒り」を感じさせ、「《羊たち》」に「動揺」を与える。中でも、「赤い革ジャンパーを着こんで隅にうずくまっていた《羊》」は、反射的に「教員」の顎を激しく殴りつける。

では、なぜこの言葉が「《羊たち》」に動揺を与え、暴力的反応を引き起こしたのか。従来の研究は「教員」を基本的には「傍観者」として位置づけてきた。しかし、第一節で詳述した「《羊たち》」の形成過程を踏まえれば、「教員」たちは単なる「傍観者」ではなく、「くすくす笑」うことで積極的に加害に加担していた可能性が高い。重要なのは、「被害を受けなかった者たち」が、この「《被害》」の構造において加害的な立場にいたという事実である。

「外国兵が突然歌いはじめた。そして急に僕の耳は彼らのざわめきの向こうで、日本人の乗客がくすくす笑っているのを聞いた。僕はうちのめされ押しひしがれた」。「外国兵」によって裸にされ、辱めを受ける「僕」。その姿を見て、「日本人の乗客」は「くすくす笑」う。そして、その嘲笑の音を「僕」ははっきりと聞き取り、「うちのめされ押しひしがれる」。

では、この「くすくす笑」った「日本人の乗客」とは誰か。重要なのは、語り手「僕」が聴覚的に嘲笑を捉えなすぎず、その主体は「日本人の乗客」という漠然とした集団に留まっている点である。誰が笑っているのか、どこから聞こえるのか——これらは不明である。この時点で嘲笑の主体は、輪郭を持たない、不定形が存在

にとどまる。

しかし、「外国兵」が去った後、この不定形の集団は次第に輪郭を獲得していく。テキストは、「教員たち、被害を受けなかった者たちはバスの前半分に、興奮した顔を群がらせて僕らを見ていた」と記している。この「興奮した顔」は、嘲笑の後、その集団が示す高揚した精神状態を表しており、「《羊たち》」が「うなだれ、血色の悪くなった唇を噛んで身震いしていた」のと対照的である。

そして、語り手の視線は、この集団の中から、「教員」という個人へと集中していく。「僕はとくに教員が熱をおびた眼で僕らを見つめ、唇を震わせているのに気がついていた」。そして、「教員」が立ち上がって発話する際、語り手は決定的な認識を示す。「彼はバスの前部の客たち、被害をうけなかった者たちの意見を代表しているように堂々として熱情的だった」。

この「代表しているように」という語り手の認識は重層的である。第一に、「教員」が集団の現在の「意見」のスポークスマンであることを示している。第二に、より重要なのは、この「代表」という認識が、遡及的に機能している点である。語り手にとって、不定形であった過去の嘲笑の主体——「日本人の乗客」という集団——が、現在の「意見を代表」する「教員」という個人に集中し、象徴化されている。つまり、「僕」の認識において、過去に「くすくす笑」った不定形の集団と、現在「代表」として立ち現れる「教員」という個人とは、時間的に連続した加害の構造において結びついているのである。

語り手にとって、「教員」は「被害をうけなかった者たち」の「代表」として位置づけられており、その集団の過去の行為——「くすくす笑」という嘲笑——を引き受け、体現する存在として機能している。「教員」が

実際に「くすくす笑」ったという直接的な描写は存在しない。しかし、語り手「僕」にとつて、「教員」は集団の加害性を象徴する存在である。その意味で「教員」は単なる傍観者ではなく、「外国兵」と同じく、「僕」を精神的に「圧しひし」ぐ加害者である。

村上克尚が「外国兵によつて『僕』たち日本人乗客が尻をまくられ、『羊』にされるといふ暴力が注目されてきた。しかし、『僕』がもつとも傷つけられたのは、はじめに自分一人が『羊』にされ、ほかの日本人乗客がくすくす笑うのを聞いた瞬間だ<sup>7</sup>」と鋭く指摘するように、「僕」は「外国兵」から直接的な暴力を受けた時以上に、「日本人乗客」——すなわち「教員」に代表される「被害を受けなかつた者たち」——からの嘲笑によつて、「うちのめされ圧しひしがれ」、「体を起こす気力さえうしなつて」しまう。これは、「僕」にとつて、「日本人乗客」からの嘲笑が、「外国兵」の暴力以上に精神的な苦痛を与えたことを意味する。

このように、「教員」を含む「被害を受けなかつた者たち」は、単なる傍観者ではなく、『羊たち』に対する加害者として存在している。彼らは、「外国兵」による暴力に便乗し、同じ「日本人」である『羊たち』を嘲笑することで、『羊たち』の「恥」を増幅させる役割を果たしているのである。

### 三、「僕」の『被害』を「犬のように」と語る「教員」

集団としての『羊たち』から拒絶された「教員」は、標的を「僕」個人へと定め、執拗に交番への同行を求め、「僕」は抵抗するが、「教員」は「親しい友人のように見えるはずの腕のくみかた」で「僕」を交番へと連

行する。交番で、「教員」は「僕」の《被害》を「警官」に説明する。しかし、この「教員」による説明は、「僕」自身の語りとは齟齬を来す。「教員」は「混雑しているバスの中で裸の尻を剥き出して犬のように屈まされたんだ」と語る。ここで「教員」が「外国兵」による「羊撃ち」の「羊」という語彙を欠落させ、「犬」という別の表象へとすり替えている点は重要である。

対照的に、「僕」自身の語りにおいては、《羊》という語彙が用いられている。

《羊》にされた人間たちは、みんなのろのろとズボンをずりあげ、ベルトをしめて座席に戻った。《羊たち》はうなだれ、血色の悪くなった唇を噛んで身震いしていた。そして《羊》にされなかった者たちは、逆に僕気した頬を指でふれたりしながら《羊たち》を見まもった。

「僕」の語りにおいて支配的なのは《羊》という言葉である。それは「外国兵」の「羊撃ち、羊撃ち、パンパン」という発話から、そのまま「僕」の語りへと流入したものだ。「僕」は確かに一度だけ、「僕は犬のように首を振って彼女の白けた表情を見あげ」と、「犬」の比喩を用いている。しかしこの直後に、「またうつむいて僕の前に列なる《羊たち》と同じ姿勢を続けた」とあるように、すぐに「羊たち」という自己規定へと回帰している。

この語りの齟齬は、「教員」が「僕」の経験の内実を理解していないことの表れである。「僕」にとって、「《羊》」という語彙は、第一節で詳述したように、言語の剝奪と「恥」の共有という過程を経て形成された自己

認識である。

さらに重要なのは、この「犬」という比喩が、テキストにおいて「《羊たち》」を形容するためではなく、むしろ「教員」たち、すなわち「被害を受けなかった者たち」を形容する際に用いられているという点である。

ああいうことを黙って見逃す手はないですよ、と道路工夫らしい男はいった。黙っていたら増長して癖になる。僕らを、兎狩りで兎を追いつめる犬たちのように囲んで、立った客たちは怒りにみちた声をあげ話があった。そして僕ら《羊たち》は柔順にうなだれ、坐りこみ、黙って彼らの言葉を浴びていた。

この「兎狩りで兎を追いつめる犬たちのように」という比喩において、「兎」は「《羊たち》」を、「犬たち」は「立った乗客たち」、すなわち「教員」たちを指している。つまり、「教員」は「僕」を「犬のように」と語るが、テキスト内で「犬」として語られているのは、「教員」を含む「被害を受けなかった者たち」なのである。

ここで見逃してはならないのは、この「兎狩り」の比喩が三者関係を暗示している点である。すなわち「兎」(《羊たち》)と「犬たち」(「立った乗客たち」)の他に、その「兎狩り」を主催し、「犬たち」を統率する狩猟者の存在が、暗黙のうちに示唆されている。

この「狩猟者」とは誰か。注目すべきは、「外国兵」が既にバスから降りているにもかかわらず、その権力構造が持続しているという点である。「外国兵」は、バス空間に人間／動物という二分法を導入し、「《羊たち》」と「被害を受けなかった者たち」という対立を生み出した。そしてこの対立は、「外国兵」の退場後も維持されてい

る。「立った乗客たち」が「羊たち」を「囲んで」「怒りにみちた声をあげ話しあう」という行為は、「外国兵」が設定した秩序を反復している。「教員」を含む「被害を受けなかった者たち」は、自らを「人間」の側に位置づけ、「羊たち」を「動物」として扱う。これは、「外国兵」が設定した秩序を内面化し、反復する行為である。

ここに、権力構造の三層性が浮かび上がる。最上位に「外国兵」（狩猟者）、中間に「教員」を含む「被害を受けなかった者たち」（犬たち）、最下層に「羊たち」（兎）が位置する。人間（外国兵）／動物（犬たち）教員「兎」羊たち」という支配―被支配の構造が、この比喩の中に、入れ子状に反復されているのである。

この三層構造において重要なのは、「教員」が「外国兵」の設定した秩序を内面化し、「羊たち」に対する統制の主体として機能している点である。「外国兵」という直接的な暴力主体が去った後も、「教員」はその権力構造を引き継ぎ、「羊たち」を「動物」として扱い続ける。そしてこの権力構造の中で、「教員」は、集団としての「羊たち」の中から「僕」という個を抽出し、「犠牲の羊」として仕立て上げようとする。

#### 四、犠牲の《羊》

「羊たち」という集団から拒絶された「教員」は、標的を「僕」個人へと絞り込む。「僕」はバスを降りた後も、「教員」から「過度に優しい声」で執拗に追跡される。そして交番で、「教員」は「僕」に対して次のように懇願する。

誰か一人が、あの事件のために犠牲になる必要があるんだ。君は黙って忘れたいだろうけど、思いきって犠牲的な役割をはたしてくれ。犠牲の羊になってくれ。

「犠牲の羊」とは、旧約聖書レビ記に由来し、共同体の罪を背負わされて荒野に追放される山羊を指す。「教員」がこの言葉を用いることは、「僕」に「外国兵」による暴力の記憶を一身に背負わせ、それを公的に証言させようとする意図を示している。つまり「教員」は、「《羊たち》」という集団の中から「僕」という一人の個を選び出し、その個人に暴力の記憶を集中させ、公的に晒すことで、目的を達成しようとしているのである。「僕」は最初に「《羊》」にされた者であり、最も象徴的な被害者である。さらに、テキストにおいて「僕」は「学生」として語られており、「教員」という統制主体に対して従属的な立場にある。「君の住所と名前をいえよ」と「教員」が命令する時、そこには明確な上下関係が前提とされている。

しかし、「教員」が「僕」を「《羊たち》」の中から抽出し、たった一人の「《羊》」として「犠牲的な役割」を果たさせようとする一方で、「僕」は新たな、そしてより苛烈な「羞恥」を味わう。

「僕」が初めて「《羊たち》」の一員として「外国兵」から「《被害》」を受けた時、確かに「僕」は「恥をかかされ」た。しかし、それはあくまで集団の一員としての受苦であり、単独で味わう「羞恥」ではなかった。「僕」は、「賤しい親近感」を感じながらも、「《羊たち》」を「おなじ空気のなかへ裸の尻をさらした仲間」と認識する。そしてその繋がりは「肉親」という強い紐帯を想起させる言葉で語られている。つまり「僕ら」「《羊たち》」

は、「外国兵」からの「《被害》」と「恥」を共有し、分かち合うことのできる「仲間」という共同性を、一時的にせよ、獲得していたのである。

しかし、「教員」による抽出は、この共同性を解体する。「教員」は、バスから降りた「僕」に「他の連中はみんなだめだけど、君だけは泣寝入りしないで戦うだろう？」と執拗に「戦い」を迫り、「僕」を他の「《羊たち》」から切り離す。そして、「僕」の「とまどった抵抗」を押し切って、無理矢理「警察」に連れていき、そこで「《被害》」を報告する。「僕」は、自らが受けた屈辱を、他者の言葉（第三節で分析したように「犬のように」と歪曲された形）によって語り直され、公的な場に暴露されるという二次的加害を受ける。「羞恥が熱病の発作のように僕を揺り動かした」。

このように「僕」が「《羊たち》」の中から、たった一人の「《羊》」として抽出されることで生じる「羞恥」は、「肉親」のような、「おなじ空気の中へ裸の尻をさらした仲間」と共有できるものではなく、たった一人で引き受けなければならない、孤独で、過酷なものである。「教員」によって「犠牲の羊」とされた「僕」の「羞恥」とは、「仲間」と共苦することができない、剥き出しの「羞恥」として、「僕」一人に突き付けられるのである。

しかし、「犠牲の羊」を完成させるためには、もう一つ決定的な要素が必要だ。それが「名前」である。「教員」は「君の住所と名前をいえよ」と「僕」に命令し、交番から抜け出して逃げる「僕」を執拗に追跡する。なぜなら、「名前」という個を識別し特定する記号なくしては、「僕」を「《羊たち》」という匿名の集団から完全に分離し、社会に晒すことができないからである。

つまり、「教員」にとって「名前」とは、「僕」という個人を統制し、「犠牲の羊」として確定させるための、不可欠な手段なのである。「僕」は「体じゅうのあらゆる意志と力をつかって」「名前」を隠し、沈黙を守る。この「名前」をめぐる攻防は、単なる個人情報開示の問題ではない。それは、「教員」の統制欲望と、「僕」の抵抗という、より根源的な対立の表れである。

## 五、「教員」の欲望と「奇妙な並列」

「僕」の抵抗が続く時、「教員」の態度は大きく変化する。「過度に優しい声」は消え、一人称は「僕」から「俺」へと変わる。

お前は、と教員が疲れに嘎れた声を出した。どうしても名前をかくすつもりなんだな。僕は黙ったまま教員を睨みつけているだけで、体じゅうのあらゆる意志と力をつかっていた。

俺はお前の名前をつきとめてやる、と教員は感情の高ぶりに震える声でいい、急に涙を両方の怒りにみちた眼からあふれさせた。お前の名前も、お前の受けた屈辱もみんな明るみに出してやる。そして兵隊にもお前たちにも、死ぬほど恥をかかせてやる。お前の名前をつきとめるまで、俺は決してお前から離れないぞ。

従来、江藤淳は「教員」を「社会正義を楯にとって」「僕」に告発を迫る存在として位置づけ、以降の研究も

この枠組みを継承してきた。しかし、この一人称の変化は、「教員」の本質的な変貌ではなく、「社会正義」という言説によって覆い隠されていた「教員」の本来の姿が、より露骨な形で現れたに過ぎない。実際、「教員」は、テキスト全体において一貫して、他者を統制し、他者に代わって語る主体として描出されているのである。

テキスト冒頭、「教員」は「膝の上に小学生の答案の束をひろげている、若い教員風の男」と語られる。「教員」は「束」という語で複数の「小学生」を、「答案」という語で多数の「小学生」を評価する主体として描出されている。つまり、「教員」は、集団を評価し、序列化し、統制する権力を持つ主体として、テキストに導入されているのである。

第二節で詳述したように、「被害を受けなかった者たち」と《羊たち》との対立において、「教員」は「被害をうけなかった者たちの意見を代表しているように堂々として熱情的だった」と語られる。「教員」は、集団の「代表」として、その集団に代わって語る権力を行使している。

さらに、「教員」は「日本人を獣あつかいにして楽しむのは正常だとは思えない」と述べることで、「日本人」という国民的共同体の声を代弁する位置に自らを置く。そして、この「日本人」の代弁者として、「教員」が訴えかける相手が、警察という国家権力である。「教員」は「僕」を無理矢理交番に連れて行き、「警官」に《被害》を報告する。ここで「教員」は、国家権力を動員することで、自らの統制欲望を実現しようとしている。

しかし注目すべきは、この「日本人」という共同体の内部においても、権力関係が存在するという点である。「教員」が「警官」に対して「僕」の身分を説明する際、「この学生だけが被害者じゃないんだから」と、「僕」を「学生」として語る。ここには、「教員」と「学生」という統制する主体と統制される客体という、明確な上

下関係が示されている。つまり、「教員」は「日本人」を代弁すると称しながら、実際にはその「日本人」内部の権力構造において、自らを統制する側に位置づけているのである。

このように、「教員」は、テキスト全体において、集団を統制し、評価し、代表し、代弁する主体として一貫して描かれている。そして、これらの役割に共通するのは、他者を統制し、他者に代わって語るといふ権力の行使である。「社会正義」は、この統制欲望を正当化するための言説として機能している。

しかし、「教員」のこの統制欲望は、ことごとく阻害される。《羊たち》からは、その「代表」としての資格を拒絶され、殴られる。警察に訴えても、「警官」は「僕」の「名前」を得られない限り動かず、「教員」の統制欲望は国家権力によっても支持されない。そして、「僕」は頑として「名前」を明かさずとしない。さらに、「教員」の統制欲望を制約する、より絶対的な存在がある。それが「外国兵」である。第三節で論じたように、「教員」は「外国兵」から《羊》にされる可能性を孕んだ存在であり、「兎狩り」の比喩において「犬たち」として描かれている。つまり、「外国兵」は、「教員」自身をも統制する主体として、「教員」の権力を根底から制限する存在なのである。このように、「教員」の統制欲望が繰り返し阻害される時、「教員」は「感情の高ぶりに震える声でいい、急に涙を両方の怒りにみちた眼からあふれさせ」、「兵隊にもお前たちにも、死ぬほど恥をかかせてやる」と叫ぶ。

佐久本佳奈が指摘するように、この「兵隊にもお前たちにも」という並列は「奇妙」である<sup>9</sup>。なぜなら、ここで「教員」は、加害者である「兵隊」と被害者である「お前たち」を等置しているからである。しかし、「教員」の統制欲望という視点から見れば、この並列の意味が明らかになる。「教員」にとつて、「兵隊」も「お前たち」

も、ともに自らの統制欲望を阻害する存在である。加害者であるか被害者であるかは、もはや「教員」の関心事ではない。重要なのは、「死ぬほど恥をかかせてやる」という宣言である。

第二節で詳述したように、「教員」を含む「被害を受けなかった者たち」は、『羊たち』に対して「くすくす笑」うことで、既に「恥をかかせる」主体として機能していた。そして第三節で論じた三層構造において、「教員」は「外国兵」の設定した秩序を内面化し、反復する存在として位置づけられていた。つまり、「教員」は既に、「外国兵」と同様に、他者に「恥をかかせる」権力を行使していたのである。

「死ぬほど恥をかかせてやる」という言葉において、「教員」は、「外国兵」と対等な立場に自らを置いている。「外国兵」が『羊たち』に「恥をかかせた」ように、「教員」もまた「兵隊」にも「お前たち」にも「恥をかかせる」ことができる主体として、自らを宣言しているのである。これは、「教員」が「外国兵」の権力を模倣し、それと同等の力を行使しようとする試みであると解釈できる。

そして「教員」は「お前の名前をつきとめるまで、俺は決してお前から離れないぞ」と、「僕」一人にターゲットを定める。第四節で論じたように、「名前」は、「僕」を『羊たち』という匿名の集団から分離し、「犠牲の羊」として確定させるための手段である。つまり、「教員」にとって「名前」とは、統制欲望を完遂するための鍵なのである。

「教員」の真の動機は、自らの統制欲望を満たすことにある。「社会正義」も、「日本人」も、被害者への寄り添いも、この欲望を正当化するための言説へと動員されていく。「僕」は、「教員」にとって、自らの統制欲望を満たすための手段であり、その「名前」を獲得することが、「教員」の目的なのである。

しかし「僕」は「体じゅうのあらゆる意志と力をつかって」、「名前」を告げずに「黙ったまま教員を睨み」つける。「名前」を得ることができない「教員」の統制欲望は、ここで挫折する。そして、この「名前」をめぐる攻防は、テキストの語り構造と深く関わっている。「人間の羊」において、登場人物の固有名詞は徹底的に排除されている。「僕」「教員」「車掌」「外国兵」——誰一人として、固有名を持たない。この固有名詞の不在という語りの戦略は、「僕」の抵抗を可能にする基盤であると同時に、占領下の言説空間と深く関わっている。

## 六、占領と語り

「人間の羊」の語りにおいて、固有名詞は徹底的に排除されている。第五節で論じたように、「教員」は「僕」に対して「君の名前と住所だけでもおしえてくれ」と執拗に要求する。しかし、「教員」が要求するこの二つの要素——「名前」と「住所」——こそが、テキストにおいて徹底的に排除されているものなのである。

「名前」について言えば、「僕」「教員」「車掌」「外国兵」「外国兵の女」——誰一人として、個人を特定する固有名を持たない。「住所」について言えば、具体的な都市名や地区名は一切現れない。占領軍の駐留地でさえ、「キャンプ」という、固有名詞を剝奪された一般名詞で語られるのみである。つまり、「教員」が「僕」を「犠牲の羊」として確定させるために不可欠な情報——個人を識別する「名前」と、その個人を地理的に特定する「住所」——が、語りそのものによって隠蔽されているのである。

この固有名詞の不在は、従来「ファンタジー」的手法として理解されてきた。大島丈志は「固有名詞を使用し

ない人称」から「人間の羊」を「ファンタジー」として読む可能性を指摘している。<sup>10</sup> こうした「ファンタジー」論は、「人間の羊」を現実の占領体験から切り離し、普遍的な寓話あるいは心理劇として読む視座を提供してきた。<sup>11</sup>

しかし、この解釈は、「人間の羊」が書かれた言説空間そのものを看過している。大島が指摘するように、「人間の羊」とほぼ同時期に発表された「戦いの今日」(『中央公論』一九五八年九月)は、朝鮮戦争期(一九五〇年～一九五三年)の日本、すなわち占領下の日本を舞台としている。<sup>12</sup> 両作品が同じ時代を素材としながら、「戦いの今日」が固有名詞を用いて当時の日本を描くのに対し、「人間の羊」は固有名詞を排除している。この違いは、単なる文体的選択ではない。

重要なのは、「人間の羊」の語りの時制である。山田夏樹が指摘するように、「人間の羊」は「回想ではないため」、「僕」が物語の現在で起きていることをそのまま報告する形式をとっている。<sup>13</sup> つまり、物語現在と語りの現在が一致している。そして大島が論じるように、この物語現在は占領期の日本である。ならば、語りの現在もまた占領期に位置しており、語り手「僕」は占領下の言説空間から語っていることになる。この語りの現在の設定が、固有名詞の排除を要請しているのである。

占領期の言説空間を規定していたのが、GHQのプレスコードである。岩崎文人はプレスコードについて、「主目的が連合国に対する批評批判を封じるところにあった」とし、「第四条にある『軍に対し不信又は憤激を招来するが如き記事』といった文言は、解釈によっては記述内容に大幅な制限を加えることにもなりうる」と指摘している。<sup>14</sup> 「外国兵」が『羊たち』に与えた『被害』に対する、「被害を受けなかった者たち」の「憤激」の

声、そして「教員」の「兵隊にもお前たちにも、死ぬほど恥をかかせてやる」という挑発的な言葉は、岩崎が指摘する「連合国・軍に対する言論の禁止条項」に抵触する可能性を持つ。

さらに重要なのは、十重田裕一が指摘するように、占領期における検閲が「書き手や編集者という個人レベル、あるいは出版社・新聞社などの組織レベルに浸透し、内面化された」自己検閲として機能していたという点である。<sup>15</sup> 「人間の羊」の語りは、この自己検閲を体现している。テキストにおいて、アメリカ占領軍を直接的に指し示す言葉は巧妙に回避され、占領軍兵士は国籍を剝奪された「外国兵」という空虚な記号で語られる。「外国兵」の発する言葉も、「何か」「すさまじい言葉のおそいかかり」「外国語」といった抽象的で茫漠とした表現に終始し、具体的な言語、すなわち英語を想起させる要素は徹底的に排除されている。

これらの語りは、プレスコードという不可視の検閲を内面化した語りである。つまり、占領軍兵士による日本人への性的暴力という事件を詳細に語ることで自分が、プレスコードに抵触しかねなかったからである。固有名詞の不在は、この事件を語ることで自体の困難さの刻印なのである。固有名詞を明示すれば、それは特定可能な現実の事件となり、「連合国・軍に対する言論の禁止」に直接抵触する。ゆえに、語り手は固有名詞を排除せざるを得ない。固有名詞の不在は、「ファンタジー」的效果を生むための選択ではなく、占領下の言説空間における制約の刻印なのである。

この解釈は、「人間の羊」を単なる寓話や心理劇ではなく、占領という具体的な歴史的状況のもとで書かれたテキストとして位置づけることを可能にする。「ファンタジー」論が普遍化の身振りによって歴史性を消去するのに対し、自己検閲という視座は、テキストに刻まれた歴史的痕跡を明るみに出すのである。

そして注目すべきは、この固有名詞の不在が、結果的に「教員」の統制欲望を挫折させているという点である。第五節で論じたように、「教員」は「僕」の「名前」を執拗に要求する。「名前」とは個を識別し特定する記号であり、「僕」を『羊たち』という匿名の集団から分離し、「犠牲の羊」として確定させるための不可欠な手段である。しかし、「僕」の語りは、この「名前」を決して明かさない。

プレスコードという占領下の言説統制は、確かに「僕」の語りを制約している。占領軍の国籍を明示できず、具体的な言語を特定できず、固有名詞を排除せざるを得ない。この意味で、「僕」の語りは、外部からの圧力によって失語を強いられていると言える。しかし同時に、この固有名詞の排除という語りの形式が、「教員」が求める「名前」の開示を不可能にしている。プレスコードという制約が、意図せざる結果として、「教員」の統制欲望の完遂を阻んでいるのである。占領下の言説統制という抑圧的状况が、逆説的に、「教員」の統制から防衛として機能するという、二重の抑圧構造がここに現れている。

このように「人間の羊」は、占領下の言説空間における検閲という制約のもとで語られた作品である。しかし、その制約は単なる制限ではなく、テキストの語りそのものを形成する力として作用している。固有名詞の不在、「外国兵」という空虚な記号——これらは、占領下という特殊な政治状況と、その言説空間における自己検閲の刻印として読むことができる。

## 結 論

本稿では、大江健三郎「人間の羊」を対象とし、占領下における暴力、集団の形成、そして統制欲望の構造を多角的に分析した。第一に、「《羊たち》」という集団が、「言葉」の剝奪と「恥」の共有を通じて形成される過程を明らかにした。第二に、「外国兵」——「教員」——「《羊たち》」という三層の権力構造を明らかにし、「教員」が「外国兵」の暴力を内面化し反復する存在であることを論じた。第三に、「教員」が「僕」を「犠牲の羊」として個別化しようとする統制欲望を分析した。第四に、固有名詞の不在という語りの特徴が、占領下のプレスコードという検閲の刻印であることを示した。

「人間の羊」が発表された一九五八年は、戦後日本の教育と政治状況が大きく変容する時期であった。戦後日本の教育は、GHQの五大改革指令により、修身の廃止など自由主義的な改革が行われた。しかし、一九五〇年代後半には勤務評定の実施や学習指導要領の法的拘束力付与など、国家による教育管理が強化されていた。そして、その後の全国学力・学習状況調査の実施、一九六六年の「期待される人間像」の発表へと至る、画一的で個人の自由を抑圧する硬直したシステムへの変貌が進行していく。広瀬義徳が指摘するように、「占領解除後の1950年代後半は、旧内務官僚などが中央政治・官僚組織の重職に復活し、内務省解体後もその後統官庁などで『国家保守主義』の支配ネットワークが維持強化されていた典型的な時代である」<sup>16</sup>。「人間の羊」において、集団と個人を統制しようとする「教員」の姿は、こうした教育の国家主義化という時代背景と共振していると言え

る。

さらに重要なのは、一九五八年は日米安保条約の改定交渉が開始され、一九六〇年の安保闘争へと向かう転換点であったという点である。一九五二年にGHQの直接支配は終了したが、在日米軍は依然として駐留し続けていた。大江健三郎自身、占領軍が「良き影響と悪しき影響とを、こもごも与えて去っていった」<sup>17</sup>と述べ、占領の両義性を認識していた。GHQは女性参政権の付与など「良き影響」を与えた一方で、RAA・パンパン・オンリー等、女性に対しては「悪しき影響」も与えている。女性に対する扱い一つをとっても、GHQは両義的な影響を与えていた。さらに、GHQ撤退後も、一九五七年の群馬県における在日米軍兵士による女性殺害事件（ジラード事件）に見られるように、超法規的なアメリカの疑似的な「占領」状態は続いていた。これは日本がいまだ真の独立を果たしていないことの証左であった。

道場親信が指摘する六〇年安保闘争の「五〇年代の終わり」<sup>18</sup>としての時代性の中で、「人間の羊」は、まさにその「悪しき影響」の中心にある占領軍による暴力とプレスコードという、重層的で不可視の占領の記憶を喚起した。そうした屈辱的な占領の記憶は、山本昭宏が指摘する「アメリカの基地がある限り、日本は『ほんとうの独立国』ではない、という認識」<sup>19</sup>を準備する機能を果たしていたと言える。そしてこうした準備段階を経て、「岸首相よ、みずからを恥じて退いてもらいたい」<sup>20</sup>という大江自身の六〇年安保闘争への積極的関与へと接続していくのである。本稿が分析した「恥」をめぐる権力構造への問いは、二年後の大江の体制批判において反響している。

このように「人間の羊」は、占領の記憶、教育の国家主義化、そして安保改定をめぐる政治状況という複数の

時代的要因が複雑に絡み合う中で生まれた作品である。このテキストは、単に過去の出来事を描いているだけでなく、六〇年安保闘争という戦後日本における大きな政治的うねりの前史として、歴史的に位置づけることができるだろう。

注

- 1 平野謙「今月の小説ベスト3 沢野『昆虫屋敷』 大江『人間の羊』 副田『夜の来訪者』」『毎日新聞』一九五八年一月二〇日
- 2 江藤淳「解説」(大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮社、一九五九年)
- 3 たとえば、「明らかに大江の中には閉じ込められることを受容する心性が潜んでいる」(柴田勝二『大江健三郎論…地上と彼岸』有精堂出版、一九九二年)
- 4 高橋由貴「『人間の羊』における沈黙を囲む饒舌」『日本文芸論叢』第二〇巻、二〇一一年三月
- 5 M・モラスキー「占領の記憶／記憶の占領…戦後沖繩・日本とアメリカ」鈴木直子訳、青土社、二〇〇六年
- 6 佐久本佳奈「大江健三郎『人間の羊』論…〈法〉の手前の監禁空間」『昭和文学研究』第八四集、二〇二二年
- 7 村上克尚「大江健三郎と傷の主題」『文學界』第七二巻八号、文芸春秋社、二〇一八年八月
- 8 江藤前掲書
- 9 佐久本前掲論文
- 10 大島文志「大江健三郎『人間の羊』論——単行本『後記』から新たな読みの可能性へ」『近代文学研究』第二一  
号、二〇〇四年三月

- 11 島田雅彦は「これはファンタジーとしか読めなかった」（島田雅彦、蓮實重彦「対談」大江健三郎を求めて）『国文学 解釈と鑑賞』一九九七年二月臨時増刊号」と述べ、大島丈志は「『人間の羊』に限って言えば、固有名詞を使用しない人称や『バスが霧のなかを船のように揺らめいて近づくのを待っていた』という幻想的な冒頭は、主人公の僕が現実世界からバスに乗って異界へと入っていくファンタジーとして読むことも可能な設定であると言える」と「人間の羊」を「ファンタジー」として読むことができる可能性について言及している（大島前掲論文）。
- 12 大島前掲論文
- 13 山田夏樹「大江健三郎『人間の羊』における語り手『僕』の問題性——ファンタジーから現実へ（上）」『学苑』第九三五号、二〇一八年九月。山田夏樹「大江健三郎『人間の羊』における語り手『僕』の問題性——ファンタジーから現実へ（下）」『学苑』第九七一号、二〇二三年一月
- 14 岩崎文人「GHQ／SCAP占領下の文学」（広島市文化協会文芸部会『占領期の出版メディアと検閲（プレスコード） 戦後広島の実活動』勉誠出版、二〇一三年）
- 15 十重田裕一「内務省とGHQ／SCAPの検閲と文学——一九二〇—四〇年代日本のメディア規制と表現の葛藤」（鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重『検閲・メディア・文学』新曜社、二〇二二年）
- 16 広瀬義徳「大阪における勤務評定反対運動の思想と状況・勤評闘争の『大衆性』再考の試み」『大阪の都市化・近代化と労働者の権利』二〇一五年三月
- 17 大江健三郎「きれいな手」（大江健三郎『出発点』、『大江健三郎同時代論集』第一巻、岩波書店、二〇一三年）
- 18 道場親信「戦後日本の社会運動」（岩波講座 日本歴史』第一九巻、岩波書店、二〇一五年）
- 19 山本昭宏『大江健三郎とその時代 戦後に選ばれた小説家』人文書院、二〇一九年

